

四

月になれば彼女は。サイモン&ガーファンクルの美しい曲だ。中学生のころ、レコードで何度も何度も聞いた。ずっとラブソングだとばかり思っていたが。

なぜ、この曲が浮かび、また聞いてみたくなったかといえども実に単純で、

「四月からは何をされるのか決まっていますか。」と電話で尋ねられたからである。

退職まで一月あまりとなったら、誰彼に聞かれるのも仕方ないことで、さして面倒とも思わないのだが、どう答えたにしても言葉が発した後味が妙にぎらつくのに閉口する。

「隠居します。」

そう答えたなら、パツと青空が広がるかと思えていたのはいつ頃までだったか。何だろうこのスカッとした天気は。

電話の主は、教育委員会の人事担当者で、ぼくのことをよく知ってるのだと、あれこれと話題を振ってきた。あいにく、名乗られたときに聞き取れず、あいまいに合わせてしまったので、知り合いですということにして話を続けなければならなくなった。

「講師が足りなくてほとほと困っています。ぜひもやっていただけませんか。」

教育委員会からというだけで、そういう話だろうとは察していたが、ついにおいでなすつたか。教員不足の深刻さは周知の事実で、四月に欠員を抱えたままスタートするなどという異常事態がこのままだと常態化しかねないところにまで至っている。言葉そのままに信じたものはわからないが、人集めの苦労は並大抵ではないだろう。気の毒に、と思ってしまうところからこちらの切っ先は鈍る。

「ご苦労は十分にわかるのですが、とても…。」  
「そうおっしゃられずに、一つ考え直してもらえませんか。」

「いやあ…。」  
はつきりしない自分の応答に自分がいらつく。

「もう次が決まっているのですね?」  
隠居だと言ったはずだが。それは決めていることにならないのか。歯切れが悪いばかりに追い詰められてしまった。

「はい、決まっています。」  
そう言うと、残念だの、気が変わったらだの言いつつ、どうやら引き下がってくれた。苦いものが残る。

四月になればやってくる彼女は、迷いの六月を経て七月に飛び去り、八月に死んでいく。そして九月、私は思い出す。すべては移ろい過ぎていくことを。



専業ババ奮闘記 (その2) 42

木幡智恵美

里帰り (3)

ビニール製のバスタブの空気漏れをビニールテープで補修はしたものの、買ってから五年半、寛大、実歩が使い、三人目ともなると、完全修復は無理だ。連日、空気が抜けて萎まないうちに、娘と二人汗をかき宗矢の沐浴をさせた。

夜は、実歩が寝入り端に咳をしたり、夜中に鼻が詰まったりで寝苦しそうにしていた。それでも、保育所を休むほどのことではなく、何とか二人とも保育所に通ってくれた。義母の方は身の回りの世話をし、デイサービスに送り出したり、かかりつけ医に連れて行ったりの日を過ごし、宗矢がうちに来てから初めての週末を迎えた。

この日は、義母をデイサービスに送ると、夫も息子も遊びに出、家には娘と三人の孫、そして私の四人が残った。ふと、三十年前の光景がよみがえってくる。私が二男を産んで、まだ一か月も経たない頃、夫は二泊三日の職員旅行、義母は姉妹でやはり二泊三日の温泉旅行に出かけ、三人の子と私が家に残された。生後一か月の乳児がいるので、長男を保育所にも送れず、三人の子を二日間家の中に押し込めて過ごした。幸い夏休みに入ったばかりの暑い日で、ビニールプールに水を溜めて水浴びをさせることができたのは助かった。一年生になって、友だちができ、本当は外で友だちと遊びたいであろう娘も、私の事情を察して、弟二人と家でずっと過ごしてくれた。

娘には、私が職場の運動会で休めず、夫も病み上がりで運動ができなかったため、二男の保育所の運動会には、親代わりで競技に出てもらったこともある。親の都合でいろいろと我慢をさせたり、無理をさせたりしてきた。逆に今、娘にはできるだけのことをしてやらねば。

この日は、パンとクレープを寛大、実歩と一緒に作った。宗矢を風呂にも入れねばならず、目まぐるしい忙しさだった。その分、焼き立てのパンの美味しかったこと。寛大は三個半、実歩も二個半食べた。デザートのクレープを食べる実歩は、口の周りを真っ白にして笑っている。

昼食後、母子四人が昼寝したので、二階に上がって炬燵にはまると、睡魔が襲ってきた。

30代フリーター やあ、ジイさん。

「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります」と発言し、女性を蔑視したと批判されている森喜朗が東京五輪組織委員会を辞任した。彼の発言は、日大アメフト部の悪質タックル事件をはじめ、近年スポーツ界で相次いだ不祥事と共通点が感じられる。

「平等」の理念に反する封建制の残滓を引きずっているところがそうだ。

年金生活者 スポーツは最後に勝者と敗者に分かれる。その点に限れば「不平等」な結果を目指す身体活動と違っていい。その代わり厳格なルールが設定され、そのもとの「平等」が目指されている。それでも勝者と敗者の厳然とした差は、封建的な身分制の残滓を引きずる社会では「平等」の侵害に結びつきやすい。

30代 静岡県知事の川勝平太は森を「女性蔑視をする人ではない」と擁護したと報じられている（共同通信、2月9日）。

年金 森自身も女性を蔑視したつもり

位にある「国際権力」として森を「解任」したととらえることができる。

この「国際権力」は司法手続きも行政手続きも経ることなく、短期間のうちに処分を決定し、実行した。その意味で本来の国際法以上の威力を発揮したとすることができるとどこにも実体的でないような権力などそもそも存在しているのか、それこそ「陰謀論」ではないかという疑問が出されるかもしれない。だが、そうではない。

この「国際権力」はグローバル資本主義が必然的に生み出したものだ。資本が国境を越えて自在に移動するようになった結果、それを一国でコントロールするのが難しくなり、G20をはじめとした国家間システムに頼らざるを得なくなつた。そのぶん国家の権力の一部が国家間システムに移り、国際社会における国家のウェイトが低下した。

それは国際法および種々の国際的な規範のウェイトを高め、新たな規範も生み出した。その代表的なもののひとつが「国際権力」と化した「ジェン

はなく、それどころか褒めたと思つているに違いない。

それは当日の発言にあつた「女性つていうのは優れているところですが競争意識が強い」という言葉からうかがえる。彼は続けて「誰か1人が手を挙げる」と

自分も言わなきゃいけないと思うんでしょうね、それでみんな発言されるんです」と言っている。「優れている」と褒めたのに、なぜたたかれるんだという思いが森にはあつただろう。

30代 その彼が発言を撤回し、謝罪した。

年金 森は記者から「誤解を招く表現や不適切な発言と言つたが、どこがどう不適切か」と聞かれ、「男女を区別するような発言をしたということですから」と答えている。つまり、女性だからとか、男性だからとかといった理由で人をけなすのはもちろん、褒めるのもNGだということ、つまり称賛も蔑視になり得ることを彼はたたかれる中で知つたと推察される。

資本主義社会の労働および労働力は

「ダーフリー」だ。五輪のスポンサー企業が相次いで森発言を批判し、IOCがあわててそれに追随し、日本政府もそれに従うほかなかったのは、「国際権力」による処断があつたからだ。森擁護論の多くはたぶんそれに気づかぬまましていると推察される。

原理的には性差を捨象して初めて成り立つ概念だ。現実にはいたるところで性差が差別を引き起こしてきたが、テクノロジーの飛躍的な発達に支えられた資本主義の高度化は、現実を原理に近づけることを可能にしつつある。

第2次産業産が牽引した産業資本主義の時代は、フィジカルな力が女性よりも強い男性が労働力として重視された。産業構造を第3次産業中心に転換した産業のソフト化は、その差の根拠を消滅させた。性差による役割分担を否定する「ジェンダーフリー」の思想は、そうした変化を背景に広がった。

森の謝罪会見は本音を押し殺してその場しのぎのためだけに行なつたのではなく、ジェンダーをめぐる現在の先端的な考え方をこの機会に知つたことが動機のひとつになつた可能性がある。

30代 そんなにすぐに考えを変えられるのか。

年金 「ジェンダーフリー」はすでに主張や運動の段階を超えて国際法に準じる規範となつており、国家権力の

30代 朝日新聞は森の辞任を「世論の批判に押されての辞任騒動」と報じている（2月12日朝刊）。

年金 その「世論」は「国際権力」と化した「ジェンダーフリー」に「押されて」広がった。

世論は権力にあと押しされて広がる。政府に反対する世論であつてもそうだ。集団的自衛権の行使を容認する安保法制に反対する世論が広がつたのは、集団的自衛権の行使を憲法9条違反とするそれまでの政府の憲法解釈があつたからで、そうした解釈は政府による権力行使のひとつにはかならない。

ただし、「国際権力」としての「ジェンダーフリー」が森を「解任」したといつても、じかに彼に引導を渡したわけではない。この権力は、国家のような、あるいは国連のような固有の権力行使の機関を持つていないわけではないからだ。代わつて権力を行使したのが、世界および日本の世論であり、つけ加えれば五輪のスポンサー企業やIOCだった。

ニュース日記 774  
中村 礼治

## 権力としての 「ジェンダーフリー」